

FD NEWS

No.26 2009年3月31日
摂南大学 FD 委員会
〒572-8508 寝屋川市池田中町 17-8
TEL: 072-839-9106
E-mail: kyomu@ofc.setsunan.ac.jp

摂南大学 

社会人基礎力教育の意味するもの

副学長 奥林康司

高等教育課程としての大学教育においても社会人基礎力の育成が叫ばれるようになった。経済産業省の社会人基礎力では、社会人として求められる力として、主体性や実行力を意味する「前に踏み出す力」、課題発見力や計画力を意味する「考え抜く力」、規律性や状況把握力などを意味する「チームで働く力」を教育の課題としている。これらの社会人基礎力は従来では大学に入る前に当然身につけておくべき能力と考えられていたものである。その基礎力の上に、それぞれの分野における高度な専門知識や技能を身に付けることが大学教育の課題と考えられたのである。

今日の学生の勉学意欲や受講態度を見ると、単に専門知識を身につけさせることのみならず、勉学意欲や受講態度それ自体を教育する必要に迫られる。従来の大学教育のように最先端の専門知識を講義するだけでは教育したといえなくなってきている。新世代の学生を前にして、従来の教育方法の下で教育を受けた教師にとって大きな戸惑いであり、大学教育以前の教育のやり方を学ばねばならなくなっている。FD が重視されるゆえんでもある。

しかし、大学教育である以上、専門的知識を教育する過程の中で勉学意欲を引き出し、新しい知識を獲得しようとする態度を身につけさせる必要がある。筆者の場合、経営学の中で組織の専門的概念を教えるに際して、それらを学生が経験から知識としてもっている事象に置き換えて説明するようにしている。

例えば、野球やサッカーについての知識や経験は多くの学生が持っている。野球の場合はなぜ監督がバッターに細かな指示を出すのか、それに対し、サッカーの場合は誰がゴールに向かってシュートするかをなぜ監督が決められないのかを問いかける。学生はそれぞれに自分なりに考えた回答を発表する。自分の経験や知識から考えることが出来るので、自主的に発言する。その発言に更になぜそのように考えるかを問い直す。そうするうちに自分なりに考え始めるのである。表現は正確ではないとしても、理論で想定されているポイントを指摘する学生もいる。それを素材にして、上意下達の機械的組織とメンバーの自発性を前提とする有機的組織の編成原理の違いを説明するのである。疑問が解けて納得した顔をする学生も出てくる。

大学では自分で考えてみるのが重要であり、それが高校での勉強の仕方と根本的に違う点だと繰り返し話している。期末試験の答案に「考えること」の重要性、面白さが少し解ったと書いている学生もいる。自分なりに考えてみるのが社会人基礎力の出発点ではあるまいか。

2008 年度後期「学生による授業アンケート」実施結果報告

FD 委員会 (SG1)

I 実施状況

2008 年度の学生による後期授業アンケートは、11 月 27 日 (木) ～12 月 10 日 (水) の 2 週間にわたって実施された。

実施対象は前期と同様に、ゼミ・実験・演習および履修者数・回答者数が 10 名以下の科目を除く全授業科目である。また、アンケートの実施方法も前期と同じである。詳細については、前期のアンケート実施結果報告を参照されたい。

集計結果の取り扱いについても、前期と同様に、①各授業担当教員への結果報告、②各学部・学科への結果報告、③摂南大学内の掲示による公開、④摂南大学ホームページ上に公開希望科目の学内公開を行った (公開率 37%)。

II アンケート結果の概要

「前期授業アンケート結果報告」と同様に、以下の 10 項目にわたる質問について、各質問にその特色を示す。

(1) 質問 1 : 「この授業にどの程度出席しましたか。」

表 1 出席状況

	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	計
100%	1,816	1,494	1,304	1,966	1,033	2,506	2,330	4,740	1,674	18,863
80～100%未満	636	815	567	595	693	2,544	1,798	1,278	1,164	10,090
60～80%未満	98	260	169	164	210	657	447	242	445	2,692
40～60%未満	16	34	20	14	27	71	70	61	103	416
40%未満	6	18	18	12	18	14	41	16	52	195
平均	4.65	4.42	4.50	4.63	4.36	4.29	4.35	4.68	4.25	4.46

100%出席したと回答した学生が圧倒的に多く (全体の 58.5%)、次いで 80～100%出席した学生が多い (全体の 31.3%)。したがって、約 9 割の学生が 8 割以上出席したことになり、前期とほぼ同様の結果が得られた。また、全学部・学科の平均値も、4.46 を示し、各授業ともきわめて出席率が良いという結果となった。この点についても、前期と同様、アンケートの実施日が、講義回数 10 回～11 回目にあたるため、出席率の良い学生が定着していたことが関係していると思われる。

(2) 質問 2 : 「この授業に意欲的に取り組みましたか。」

表 2 取り組み状況

	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	計
強くそう思う	892	674	416	686	564	2,041	1,454	1,829	781	9,337
そう思う	1,065	1,049	810	1,073	777	2,438	1,951	2,565	1,294	13,022
どちらともいえない	480	699	669	762	499	1,067	914	1,470	1,040	7,600
あまりそう思わない	81	156	128	148	94	171	231	329	220	1,558
全くそう思わない	47	42	52	74	44	64	123	131	97	674
平均	4.04	3.82	3.68	3.78	3.87	4.08	3.94	3.89	3.71	3.89

全学部・学科の平均値は、3.89 で、「4.そう思う」と「5.強くそう思う」の割合が高い。なかでも、C科とL部はともに平均値が4を越え、前期と同様の結果が得られた。

(3) 質問3：「この授業の復習をしましたか。」

表3 授業の復習

	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	計
強くそう思う	360	285	172	177	207	962	628	587	301	3,679
そう思う	609	505	392	307	405	1,175	899	884	406	5,582
どちらともいえない	938	955	853	861	698	1,789	1,358	2,244	1,142	10,838
あまりそう思わない	363	509	416	665	346	954	849	1,291	686	6,079
全くそう思わない	298	363	239	736	322	897	938	1,308	895	5,996
平均	3.14	2.94	2.92	2.46	2.91	3.06	2.88	2.71	2.57	2.84

この質問に関しては、全学部・学科の平均値が2.84と、前期同様、きわめて低い値を示している。「3.時々した」が最も多く、続いて「2.あまりしなかった」、「1.まったくしなかった」の順になる。授業の復習については、前期と同様、非常に消極的であることが明瞭となった。授業以外に、課題を与えてレポートを提出させるなど、なんらかの対策が必要であろう。

(4) 質問4：「この授業の到達目標を達成できましたか。」

表4 到達目標

	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	計
強くそう思う	449	341	209	326	296	1,418	864	792	438	5,133
そう思う	819	837	520	719	577	2,028	1,526	1,462	888	9,376
どちらともいえない	1,084	1,170	1,027	1,345	868	1,926	1,717	3,290	1,640	14,067
あまりそう思わない	133	197	216	226	156	264	372	528	292	2,384
全くそう思わない	79	68	101	117	83	127	182	238	157	1,152
平均	3.56	3.45	3.25	3.33	3.43	3.75	3.54	3.32	3.34	3.47

全学部・学科の平均値は3.47を示し、前期の平均値より0.11ポイント上昇した。この質問に関しては、今年度より質問項目に加えられたため、前期においては第1回目の授業で説明できなかった。しかし後期においては、第1回目の授業で説明できたはずである。それにもかかわらず、平均値がほとんど変わらないことは、後期第1回目の授業において、各教員が「到達目標」を詳しく説明しなかったか、あるいは、学生自身が「到達目標」を十分理解できていないかのどちらかであるように思われる。「到達目標」の意味が今ひとつ

あいまいなため、学生にどのように理解させるのか検討する必要があるろう。

(5) 質問 5 : 「この授業はシラバス等の内容に沿って行われましたか。」

表 5 シラバスの内容

	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	計
強くそう思う	557	404	271	402	350	1,758	1,148	1,023	571	6,484
そう思う	854	823	632	807	675	2,060	1,684	1,749	1,094	10,378
どちらともいえない	997	1,243	983	1,326	831	1,766	1,515	3,137	1,512	13,310
あまりそう思わない	90	98	125	131	72	127	194	214	139	1,190
全くそう思わない	69	48	65	82	51	76	132	159	109	791
平均	3.68	3.55	3.44	3.48	3.61	3.92	3.75	3.52	3.55	3.64

全学部・学科の平均値は 3.64 と 0.05 ポイント上昇したが、前期同様、全学部・学科の平均値には大きなばらつきはなかった。次の質問 6 の平均値が、3.02 を示しており、前期同様シラバスをしっかりと読んでいない学生が多く、シラバスの内容どおりに授業が進んだかどうか、判断のつかない学生がかなりの数いたと思われる。

(6) 質問 6 : 「この授業を受けるにあたり、シラバスをしっかりと読みましたか。」

表 6 シラバスの熟読

	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	計
強くそう思う	417	304	194	232	259	1,497	936	728	493	5,060
そう思う	575	608	386	467	442	1,543	1,190	770	742	6,723
どちらともいえない	932	976	836	943	675	1,489	1,215	1,834	1,168	10,068
あまりそう思わない	292	354	332	415	258	579	632	1,118	459	4,439
全くそう思わない	350	375	328	693	348	676	706	1,871	562	5,909
平均	3.16	3.04	2.90	2.68	3.00	3.45	3.22	2.58	3.04	3.02

全学部・学科の平均値は 3.02 で、前期と比較して 0.09 ポイント上昇したものの、相変わらず、学生がシラバスをしっかりと読んでいないことが明瞭である。

シラバスは大きく重いため、4 月の受講登録時に読んだ後、本棚に置いたままの学生が多い。教員によっては、第 1 回目の授業に自身の授業部分を印刷して配布し、説明している例もみられる。印刷費もかさむことから、シラバスを各学生が授業ごとに切り離し、毎回の授業に持参するような指導を行うことも考えられる。一方、教員側においても、授業中にシラバスの説明を詳しく行うよう注意する必要があるろう。

(7) 質問 7 : 「この授業の担当教員から授業に対する熱意を感じましたか。」

表 7 教員の熱意

	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	計
強くそう思う	703	532	375	532	563	2,664	1,561	2,087	885	9,902
そう思う	942	1,020	750	1,131	771	2,037	1,843	2,520	1,305	12,319
どちらともいえない	678	845	721	820	502	842	888	1,299	891	7,486
あまりそう思わない	140	148	123	164	90	150	213	274	217	1,519
全くそう思わない	107	74	107	100	56	96	179	147	131	997
平均	3.78	3.68	3.56	3.67	3.86	4.21	3.94	3.97	3.76	3.89

全学部・学科の平均値は 3.89 で、前期より 0.04 ポイント上昇した。「4.そう思う」、「5.強くそう思う」を選択した学生が多い。

また前期同様、L 部の平均値のみは 4 を大きく越え 4.21 を示し、さらに 0.08 ポイント上昇している。語学の少人数クラスが多数開講されていることが、高ポイントの要因と思われる。

(8) 質問 8:「この授業の担当教員は、授業内容を理解させるための工夫をしていましたか。」

表 8 理解させる工夫

	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	計
強くそう思う	647	493	335	523	505	2,578	1,377	1,939	798	9,195
そう思う	860	970	720	1,001	739	1,998	1,736	2,339	1,232	11,595
どちらともいえない	712	882	708	861	532	899	990	1,455	934	7,973
あまりそう思わない	195	181	166	219	122	201	315	376	291	2,066
全くそう思わない	155	91	147	146	83	114	262	217	175	1,390
平均	3.64	3.61	3.45	3.56	3.74	4.16	3.78	3.85	3.64	3.78

全学部・学科の平均値は 3.78 で、前期と比較して 0.05 ポイント上昇した。この質問についても、L 部の平均値のみは 4.16 を示し、0.13 ポイントの上昇がみられる。少人数クラスが多いため、授業内容に工夫を懲らしやすいものと思われる。

(9) 質問 9:「この授業の担当教員の話し方は、明瞭でわかりやすかったですか。」

表 9 教員の話し方

	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	計
強くそう思う	619	503	328	469	497	2,538	1,365	1,842	773	8,934
そう思う	816	926	643	897	705	1,966	1,709	2,212	1,156	11,030
どちらともいえない	738	861	723	923	544	898	958	1,516	958	8,119
あまりそう思わない	203	200	208	262	137	241	359	482	334	2,426
全くそう思わない	190	127	174	196	99	146	293	276	209	1,710
平均	3.57	3.56	3.36	3.43	3.69	4.12	3.75	3.77	3.57	3.72

全学部・学科の平均値は 3.72 で、前期結果より 0.06 ポイント上昇した。この質問に関しても、L 部の平均値は 4.12 ポイント上昇し、4.12 と高い値を示している。前期同様、単語の発音練習や会話、朗読など、大きな声で発声するクラスの多いことと関連があるものと思われる。

(10) 質問 10:「総合的に考えて、この授業を受講してよかったと思いますか。」

表 10 総合満足度

	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	計
強くそう思う	639	589	354	541	522	2,575	1,483	1,994	852	9,549
そう思う	842	901	638	863	693	1,950	1,675	2,314	1,141	11,017
どちらともいえない	774	888	772	994	572	914	1,036	1,491	1,058	8,499
あまりそう思わない	165	150	169	188	107	213	249	320	223	1,784
全くそう思わない	141	85	139	153	80	137	236	203	152	1,326
平均	3.65	3.67	3.43	3.53	3.74	4.14	3.84	3.88	3.68	3.80

全学部・学科の平均値は 3.80 で、前期より 0.05 ポイント上昇した。L 部を除く他の学部・学科に大きなばらつきはない。一方、L 部のみは平均値が 4 を越え、0.11 ポイント上昇して 4.14 という結果となった。質問 7～9 の平均値がいずれも高い値を示しており、満足度も高かったものと判断される。

この「総合満足度」について、2002 年度からの経年変化をみると（図 1）、2006 年度からは伸びが鈍化しており、3.80 前後が上限のように思われる。近年における学生の学力低下傾向を考えると、3.80 を維持していることは教員側の努力の結果とも解釈できる。今後、学生の満足度をどのように高めていくのか、検討する時期にきているのではないだろうか。

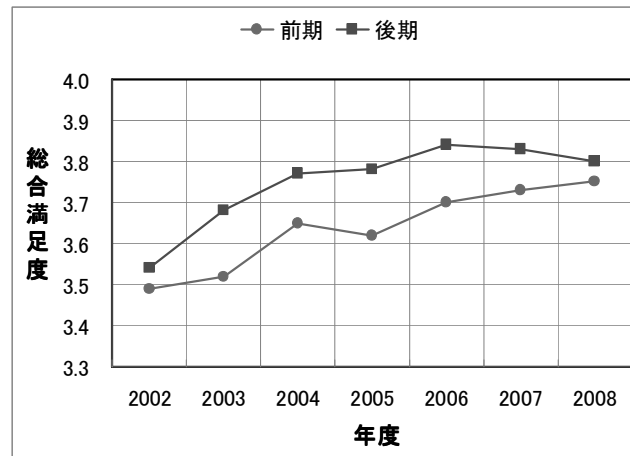


図 1 総合満足度の経年変化

III アンケート結果の分析

学生の「総合満足度（質問 10）」と、それをもたらした諸要因について、前期と同様、次の(1)～(6)の項目に分けて分析を行った。

(1) 受講者数と満足度

表 11 受講者数と満足度

	科										計
	C	A	E	M	B	L	I	Y	J		
	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	
受講者											
-20	4.09	0	3.92	4	3.55	4.45	4.27	4	4.24	4.36	
20-40	3.76	3.86	3.76	3.39	3.78	4.19	3.95	4.07	3.89	3.96	
40-60	3.76	3.48	3.21	3.76	3.8	4.25	3.87	3.8	3.79	3.74	
60-80	3.49	3.84	3.27	3.61	3.84	4.12	3.84	4.83	3.85	3.71	
80-100	3.73	3.5	3.59	3.36	3.67	3.74	4	4.12	3.73	3.75	
100-120	3.56	3.88	3.23	3.6	0	3.9	3.61	3.83	3.81	3.7	
120-140	3.51	3.47	3.54	3.39	3.58	3.65	3.77	3.7	3.69	3.64	
140-160	0	3.88	0	3.39	0	3.74	3.55	3.63	3.69	3.69	
160-180	0	3.62	0	2.78	0	3.88	3.59	3.97	4	3.8	
180-200	0	3.17	0	0	0	3.76	3.9	4.22	3.47	3.98	
200-	0	0	0	0	0	0	3.24	3.83	3.28	3.49	
計	3.65	3.67	3.43	3.53	3.74	4.14	3.84	3.88	3.68	3.8	

全学部・学科の平均値が、3.80 であるのに対して、受講者数 20 人以下のクラスでは 4.36、20～40 人のクラスでは 3.96 と平均値がきわめて高い。また、今回の結果では、180～200

人のクラスで 3.98 と高い値がでている（Y 部の平均値が 4.22 と高かったため全体の平均が上がった）。それ以外では、前期の結果と同様、受講者数が 40 人を越えると 200 人以上のクラスに至るまで、平均値に大きなばらつきはなかった。この結果、学生にとって 40 人以下の少人数クラスの満足度がきわめて高いことが明らかである。

(2) 教員年齢と満足度

表 12 教員年齢と満足度

	科									計
	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	
	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	
年齢										
-30	0	3.78	0	4.27	0	3.95	4.25	0	0	4.07
30-35	3.74	3.81	3.43	3.3	3.69	4.14	4.13	4.24	4.07	4.04
35-40	4.06	3.96	3	4.03	4.02	4.36	3.95	4.25	3.88	4.05
40-45	4.09	3.69	3.65	3.56	3.9	4.15	3.82	3.61	3.86	3.84
45-50	4.07	3.83	3.79	3.52	3.49	4.29	3.79	3.81	3.75	3.96
50-55	3.43	3.47	3.48	3.59	4.07	4.08	3.92	3.87	3.87	3.79
55-60	3.36	3.75	3.25	3.52	3.59	4.01	3.93	3.69	3.3	3.64
60-65	3.61	3.63	3.36	3.25	3.77	4.11	3.72	3.96	3.73	3.74
65-70	2.81	3.23	3.31	3.44	3.45	3.46	3.24	0	2.94	3.32
70-	0	0	0	3.71	0	0	0	0	0	3.71
計	3.65	3.67	3.43	3.53	3.74	4.14	3.84	3.88	3.68	3.8

全学部・学科の平均値が、3.80 であるのに対して、教員年齢 30 才以下が 4.07、30～35 才が 4.04、35～40 才が 4.05 と、前期同様、40 才以下の若手・中堅の教員に対する満足度がきわめて高い。また、40～65 才の教員に対しては、ほぼ平均値に近い値を示している。それに対して、65～70 才の教員では 3.32 と平均値を大きく下回っている。この結果、学生にとっては、40 才以下の教員に対する満足度が高いように思われる。

(3) 職階と満足度

表 13 職階と満足度

区分	職階	科									計
		C	A	E	M	B	L	I	Y	J	
		A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	
専任	教授	3.49	3.71	3.33	3.51	3.72	3.95	3.68	3.85	3.39	3.67
	准教授	3.70	3.75	3.56	3.75	3.89	4.27	3.96	3.94	3.90	3.90
	講師	4.08	3.79	3.27	3.64	3.50	4.20	3.72	4.03	3.92	3.92
	助教								3.61		3.61
	計	3.61	3.73	3.39	3.56	3.75	4.10	3.77	3.91	3.64	3.78
非常勤	講師	3.79	3.59	3.48	3.48	3.74	4.19	3.91	3.79	3.77	3.83
	計	3.79	3.59	3.48	3.48	3.74	4.19	3.91	3.79	3.77	3.83
	計	3.65	3.67	3.43	3.53	3.74	4.14	3.84	3.88	3.68	3.80

全学部・学科の平均値は、3.80 である。満足度の高い順に並べると、専任講師が 3.92、准教授が 3.90、非常勤講師が 3.83、専任教授が 3.67、専任助教が 3.61 となり、前期とまったく同じ順位となった。やはり、若手、中堅の専任講師と専任准教授の満足度が高い結果となった。

(4) 授業時限と満足度

表 14 授業時限と満足度

	科									計
	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	
	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	
時限										
1	3.54	3.71	3.53	3.46	3.87	4.17	3.84	3.96	4.15	3.93
2	3.73	3.66	3.52	3.5	3.67	4.22	3.78	3.91	3.81	3.83
3	3.39	3.8	3.45	3.72	3.77	4.1	3.97	3.51	3.5	3.75
4	3.81	3.67	3.41	3.33	3.8	4.08	3.74	3.81	3.52	3.75
5	3.82	3.43	3.32	3.42	3.48	4.34	4.16	0	3.91	3.63
計	3.65	3.67	3.43	3.53	3.74	4.14	3.84	3.88	3.68	3.8

全学部・学科の平均値は 3.80 であるが、1 時限目の満足度が 3.93 と最も高く、順次 2 限目、3・4 限目、5 限目の順となった。前期の結果とは異なり、早い時限の方が満足度は高くなっている。このことは、意欲の高い学生が 1 時限目からしっかり授業に出てきていることの結果であろう。

(5) 選択・必修科目と満足度

表 15 選択・必修科目と満足度

	科									計
	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	
	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	
履区										
選択	3.66	3.67	3.46	3.49	3.69	4.14	3.84	3.9	3.68	3.82
必修	3.63	3.69	3.29	3.62	4.1	4.25	3.83	3.26	3.64	3.66
計	3.65	3.67	3.43	3.53	3.74	4.14	3.84	3.88	3.68	3.8

全学部・学科の平均値は 3.80 で、「選択科目」が 3.82、「必修科目」が 3.66 となり、前期同様、「選択科目」の方が満足度が高い。ただし、「必修科目」の中には、実習、演習が含まれていないため、両科目間の満足度に大きな違いはないと判断される。

(6) 分野別教科と満足度

表 16 分野別教科と満足度

	科									計
	C	A	E	M	B	L	I	Y	J	
	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	A10 平均	
分類										
専門	3.65	3.71	3.32	3.56	3.72	4.17	3.76	3.97	3.62	3.82
専門 関連	3.38	3.43	3.31	3.05	3.67	0	0	0	0	3.35
基礎	3.91	3.72	3.85	3.72	3.86	0	4.14	3.87	0	3.86
教養	3.37	3.56	3.75	3.62	3.81	3.87	3.9	3.36	3.85	3.75
教職	0	3.79	0	0	3.44	4.54	4	0	0	4.08
計	3.65	3.67	3.43	3.53	3.74	4.14	3.84	3.88	3.68	3.8

教科については、「専門」、「専門関連」（工学部のみ）、「基礎」、「教養」、「教職」の 5 分野に分けて分析を行った。全学部・学科の平均値は、「専門」が 3.82、「専門関連」が 3.35、「基礎」が 3.86、「教養」が 3.75、「教職」が 4.08 となっており、「教職」の満足度が非常に高い結果となった。やはり、「教職」においては、意欲の高い学生が集まっているものと思われる。

(7) 質問項目と満足度との相関

次に、質問 10 の総合満足度と、質問 1～9 の各設問との相関関係について、検討を加えたい。

質問 1～9 の各質問に対する相関係数は、質問 1 では 0.150、質問 2 では 0.578、質問 3 では 0.381、質問 4 では 0.596、質問 5 では 0.560、質問 6 では 0.392、質問 7 では 0.749、質問 8 では 0.798、質問 9 では 0.819 となった。こうした数値から、

- ①「出席状況」と総合満足度との相関は「ほとんど相関がない」。
- ②「授業の復習」と「シラバスの熟読」と総合満足度との相関は「ある程度の相関がある」。
- ③「取り組み状況」と「到達目標」、「シラバスの内容」と総合満足度については、「かなり高い相関がある」。
- ④「教員の熱意」と「理解させる工夫」、「教員の話し方」と総合満足度については、「高い相関がある」。

という結果となった。したがって、前期の結果と同様に、

- (1) 教員は明瞭でわかりやすい話し方をする。
- (2) 授業内容を理解させるための工夫をする。
- (3) 熱意のある授業をする。

以上の 3 点に注意すれば、学生は非常に満足することが再確認できた。

IV むすび

授業アンケートの各質問項目と満足度の分析から、次のような結果が得られた。

- (1) 学生評価の平均値がきわめて高かったのは、「自分の出席状況」で、4.46 を示した。
- (2) 学生評価の平均値が低かったのは、「復習をしたか (平均値 2.84)」と「シラバスをしっかり読んだか (平均値 3.02)」であった。
- (3) 受講者数が 40 人以下の少人数クラスの満足度が非常に高いことが明らかとなった。
- (4) 教員年齢については、40 歳以下の教員に対する満足度が高く、一方、65 歳以上の教員に対する満足度は低い傾向にあることが認められた。
- (5) 開講時限による満足度は、前期結果と異なり早い時限ほど満足度は高かった。
- (6) 学生の総合満足度を上げるには、従来から分析されているとおり、
 - ① 教員は明瞭でわかりやすい話し方をし、
 - ② 授業内容を理解させるための工夫をしていて、
 - ③ 熱意のある授業をすることがきわめて重要であることが再認識された。

授業改善事例

昨年度（2007年度）全学FD委員会において教員各自に授業改善報告を求めたところ、3件（文系教員2件、理系教員1件）の報告がありました。その内1件については、前回のFDニュース第25号に掲載をしましたが、今回、他の2件についてもここで紹介したいと思います。

◆授業工夫例(文系学部教員)◆

(1) パワーポイントを使わずに板書による授業の実施

かつては、パワーポイントを使った授業を行なったこともあるが、室内を暗くすると学生が寝てしまったり、必要事項がパワーポイントの資料にまとめられているため、資料だけ取って退出したり、集中力を欠いて私語をする学生が増えた。そのため、板書によって授業を進め、学生に書かせることにした。

板書をするすると授業の進みが遅くなるので、板書が長くなる内容については必要に応じてプリントを配布して対応した。また、板書をする際には、字を大きくしできるだけ内容を簡潔にまとめるように工夫した。板書させることにより、居眠りや私語をある程度減らすことができた。

(2) 授業後の小テストの実施

毎回授業の最後に、その日やった内容について、簡単な小テストを行なった。一応テストがあるということで、学生がある程度集中して授業を聞いたり、板書するようになった。また、学生がどの部分が理解できてないかがわかるようになり、授業後に質問に来る学生も少し出てくるようになった。

(3) 座席の指定

学生に自由に座らせると、非常に私語が多くなるので、座席は指定することにした。非常に簡単なことであるが、私語を減らすことに役立ったように思う。他の学校の先生に聞いても私語を減らすために、座席を指定する方法を取られている方がおられるようである。

◆授業工夫例(理系学部教員)◆

講義の冒頭で、これから講義する内容の重要な点・興味深い点を簡単に紹介する。その後、詳細な内容を説明する。さらに、最後に重要な点をまとめるというように、3回、同じ内容を話すようにしている。

「話し方」や「学生が興味もつ講義」など心がけている点が多いが、それ以外に、以下の1)～4)に要約した試みをしており、いずれも効果を上げている。

(1) 毎回、用紙を配布し、「問題に対する解答」や「講義に対する意見」などを記述してもらい、最後に記述した用紙を提出させる。

狙いを、①～⑤に示す。

- ① 出席のチェックに使う。出席点は、成績評価の際に利用。

- ② 隣の学生と小声で相談したり、ノートや教科書を見て解答しても良いことにしており、原則、採点はしない。学生にとって90分間、集中して講義を聴くのは無理なため、気分転換になる上、教員が一方的に講義をして、学生はただ聴いているだけという弊害を少なくすることができる。
- ③ その日に講義する内容の基礎知識について出題することもある。学生の解答状況を見て回り、どの程度の知識をもっているか知ることができる。他の教員の関連した講義などから得た知識も含め、学生の理解の程度を知り、講義においてどの程度の復習・補足が必要か判断する材料とする。
- ④ 講義した内容について出題をして、学生の理解度をチェックする。学生はこんなことが分かっていないのかとか、自分の講義の仕方の悪い箇所が分かり、大変に参考になる。その後、あるいは次回の講義で、補足をして、学生が正確な知識を持つことができるようにしている。
- ⑤ 問題を出して解答させるだけでなく、講義の最後に「今日の講義で分からなかったこと、あるいは理解できなかったこと」を記述してもらう場合もある。多くの学生が理解できなかった点については、次回の講義でもう一度説明するようにしている。

(2) 毎回、その日に講義する予定の内容をまとめた簡単な資料（レジュメ）を作る。

5, 6年前までは、講義のときに詳しく話すので、わざわざ資料を作成する必要はないと考えていたが、学生は資料があると、講義の全貌が分かるらしく大変に好評である。資料は、講義の前日に作成することが多いが、この作業をすることにより、教員側の頭の整理もできるので、簡単な資料の作成は学生・教員の双方にとり良いことであり推奨できる。

(3) 期末試験が近づき試験勉強をしなければならない時期に、今まで学んできた内容の「まとめ」を配布する。

「まとめ」は、目次に近いものであり（1章、1-1、1-2などのタイトルが羅列されている）、各章の最後にはキーワードが示されている。期末試験ではキーワードを中心とした出題をしており、学生は、キーワードに照準を合わせた試験勉強すれば良いようになっている。

(4) 試験問題作成と採点に最も時間を割いている。

毎回の講義は、準備時間を十分にとって分かりやすく興味深いものとなるよう工夫をしているが、それ以上に、力を入れているのは期末試験である。重要なことは、学生がどれだけ一生懸命に勉強するかであり、この目的達成の手段としては試験しかないと言っても過言ではない。簡単に単位がとれる科目については、学生は勉強をしないし、穴埋めのような問題しか出さなければ、学生は意味も理解せず単語だけを一夜漬けで覚え、結局、何も理解しないまま進級することになる。このような勉強法では、国家試験対策上も役に立たず、基礎学力がないまま国家試験勉強を始め、成績が伸びないという結果になることが多い。したがって、学生が相当に勉強しないと合格できない（勉強さえすれば合格できる）問題を作成する必要がある、記述式の試験の実施が必要である。学生数が多いだけに記述式の採点は非常に大変であるが、学生を勉強させるには、記述式試験を行うことが絶対に必要である。薬学部では再試験制度があるが、再試験では本試験と同じ問題を出すとか、事前に問題を教えるようなことはしないようにしている。同じ問題が出ると分かれば、それだけを丸暗記してくるだけで、学生が十分に勉強して、重要な点を理解するという本来

の目的は全く達成されない。

また、本試験後に試験の講評をしている。普段は、真剣に理解しようとする姿勢を示さない学生でも、本試験から再試験に向けての期間は、真剣であり、この講評講義は、学生の熱意がかなり感じられ効果がある。

関西地区 FD 連絡協議会*Newsletter より

創刊号は 2008 年 11 月に発行された。それには同年 4 月に開催された「設立総会」に関する内容が多いもののなかには加盟大学における FD 活動の現状を述べた記事もあり、それらをここで紹介する。

(龍谷大学)

—「授業評価ワークショップから学んだことと龍谷大学の取り組み」大学教育開発センター長 松本和一郎教授の寄稿文要約—

[授業アンケート]

- ① 前・後期共、原則として授業の最終週に教員の手によって行っている
- ② アンケートはマークシートと自由記述欄よりなる。
- ③ 結果は、教員本人に通知の他、Web でも学内に開示。
- ④ アンケート結果は給与等の待遇には反映させない。

[授業評価 WS より学んだこと]

- ① 授業評価以外にも多角的な評価が必要。
- ② アンケートの目的・用途を共有しなければ有効なデータは得られない。
- ③ 学期末にアンケートを実施しても自由記述欄に希望をかいでも記入者の利益にはならない。
- ④ 学生へのフィードバックの実践例として、アンケートに対する教員からの改善策・反論等を含む自己点検報告書を冊子により学生に開示。
- ⑤ 授業改善を意識した分析が必要である。
- ⑥ 個々の教員の授業改善と組織としての FD の連携が重要。

[集約された意見と今後の検討すべき項目]

- ① 評価者としての学生に疑問が残るから、名称を「授業アンケート」とする。
- ② 受講学生に改善策が及ぶように、アンケートを 2 回行う。1 つは学期半ばに記述式のものを行い、教員が学部教務委員会に提出して検討し、その内容を学期内に学生にも説明する。2 つめのアンケートは期末に行う、アンケート項目は従来とおなじもの。
- ③ 学生へのフィードバック。

(和歌山大学)

—「和歌山大学における FD の取り組み」経済学部 吉田雅章准教授の寄稿文要約—

[概要]

- ① 高等教育センター、大学教育センター等の機関は存在せず、全学部（4 学部）から選出された 10 数名の委員にて構成。
- ② 平成 10 年度、5 名の委員より発足。平成 11 年度より 10 名程度の委員にて活動。

- ③ FD 講演会、FD フォーラム、FD ワークショップ等の単発的なプログラムと継続的に実施する授業公開&検討会を中心とした活動がある。
- ④ 授業評価は教養、専門と別れて実施されており、専門科目は各学部の裁量にゆだねられている。なお、これは統一的なフォーマットを作成する方向で調整している。

[授業公開&検討会について]

とても有益である。参観教員にとっても他の教員の授業テクニックを盗み取る絶好の機会である。しかし、公開授業を自発的に引き受ける教員は極めて少ない。また、参観者も限られたメンバーとなることが多い。

[学生参加型（参画型）FD 活動]

学生と教員との意見交換会を実施。約 100 名の学生の参加があった。ここでは、「あったらいいな！こんな授業・・・」として、学生が提案する授業を可能であれば実施しようとするものである。提案は 2 年間で 40 組の応募があり、そのうち 2 つの授業が実施されたが、受講者が少なく、当該イベントの開催は断念された。

[新規の取り組み]

「授業改善大賞」の創設をはじめとして「授業参観制度（オープンクラスウィーク）」の導入の予定あり。

*2008 年 4 月 26 日設立。関西地区の約半数、104 大学・短期大学が加盟している。代表幹事校（任期 4 年）は京都大学。当初、①FD 情報支援部、②FD 共同実施、③FD 連携企画部、④広報、⑤研究部という 5 つの WG（ワーキンググループ）があったが、2008 年 10 月に新しい WG として、「出欠確認研究 WG」が加わった。本協議会設立にあたっての趣旨説明で、京都大学 田中毎実教授は、関西地区 FD 連絡協議会を「…地域内の大学、短期大学がお互いの日常的教育改善を支え合う互助組織…」と位置付けている。そして、「…単独の機関ではできない FD 活動を仲間からの助けをかりて展開したり、別々に同じような活動をするという無駄を省いたりすることができる。…」とし、さらには、「…我が国の高等教育機関はすべて、グローバル化とユニバーサル化との狭間で、しかも少子化や財政逼迫などに起因する経営危機に直面して、苦悶しています。たしかに、高等教育機関も、熾烈な市場競争のなかでこそ互いの個性を発揮し主張しあい、互いに『個性輝く大学』になることができます。しかしこの深刻な危機に際しては、互いに排除しあう競争よりもむしろ、互いに連携しあう協働こそが求められます。…」と述べている（傍点は全て筆者）。

各 SG の今年度の総括と次年度の課題について

今年度の全学 FD 委員会の各 SG における総括と今後の課題について述べてみます。

[SG1]…授業アンケート等を担当

1. 役割分担

- ① アンケート実施・集計等：中井（教務）
- ② アンケート分析・報告書原案：原（外・国際）
- ③ 自由記述欄・授業アンケートに関する調査結果の分析：藤井（経・D）
- ④ 授業アンケートの改善（Web アンケート）：橋本（工・M）
- ⑤ 議事録・FD ニュース・活動報告書作成等：八木（工・B）

2. 授業アンケート

- ① 実施日程は前期が2008年6月23日(月)～7月5日(土)、後期が2008年11月27日(木)～12月10日(水)の各2週間。アンケート内容は学園3大学共通質問項目を含むように一部変更した。
- ② 従来の分析以外に多変量解析の適用を検討した。
- ③ 「学生による授業アンケート」に関する調査(教員の回答)
「具体的にどのような授業改善をされましたか」の回答を授業改善事例として活用する。(次年度課題)

3. 自由記述欄の取扱い

- ① 学生へのフィードバック方法(掲示)
- ② FDニュースへの掲載を検討する。(次年度課題)

4. 摂南大学ホームページ上に学内公開

アンケート結果に教員がコメントを付けて学生にフィードバックする。

- ① 2006年度(15%)、2007年度(30%)、2008年度(37%)
- ② 公開希望調査の方法:2007年度より学科長・教室主任が取りまとめて回答。

5. 授業アンケート調査結果を授業にフィードバックする方法

学科単位での授業改善検討会が必要ではないか(実施している学科もある;学科長の判断)。各学部FDでの検討(次年度課題)。

6. Webアンケート

- ① 全学の授業アンケートは「定期健康診断」、個々の授業改善には、「精密検査」が必要。
Webアンケートを活用すれば、個々の科目について独自の質問項目を設定し、随時実施することができる。集計結果はすぐに得られるので、ただちに授業改善に活かすことができる。
- ② Webアンケートの実施事例:
同志社大学、上智大学、武蔵工大、大阪大学の事例紹介。摂南大学 e-learning システムにある Web アンケート作成例の紹介(簡単に作成できる)。工学部 FD 活動の一環としてテスト的に実施。
独立行政法人メディア教育開発センターが開発した「REAS(リアス)」。PCや携帯電話を利用した調査・集計システム。ただし、メディア教育開発センターにおけるデータの取り扱い(漏洩リスク)について、確認しておく必要がある。
- ③ 回収率の問題。
- ④ 有志による試行をお願いしたい。(次年度課題)

7. その他(次年度課題)

- ① アンケート結果を原則公開にする場合、アンケートを記名にするべき、という意見。
原則公開、記名・無記名については、早急に結論を出すのではなく、引き続き検討を進めることとする。
- ② 専門家の支援による授業改善:「FD研修会への参加促進」、「ファカルティ・ディベロッパーの設置」
- ③ 授業力診断: <http://icedu.co.jp/teaching/index.html>

8. 検討資料等

「記名式アンケートの事例紹介」、「FD 義務化とグローバル化・ユニバーサル化」、「学生による授業評価から FD へ」、「因子分析の適用例」、「自由記述の解釈」等。

9. SG1 会議開催

5回：5月1日、6月12日、8月25日、9月22日、3月6日

【SG2】…フォーラム、授業公開等担当

1. 全学 FD フォーラムの開催

3/18に予定。基礎教育の充実をどう図るかという年度当初の目標に合わせて、今回は「初年次教育」に焦点を当てたことから充実したプログラムとなったのではないかとと思われる。特に今回は外部講師による基調講演とそれに対する各学部の報告・討論をセットにした。目論見通り両者がうまくかみ合うかどうかは、まだ不確定ではあるが、成果が上がることを期待している。

<全学 FD フォーラムのプログラム>

日時・場所 3/18（水） 13時～17時45分 寝屋川学舎5号館5階 552教室

[第1部] 講演会 「初年次教育の実践事例」

基調講演1 濱名 篤氏（関西国際大学 学長）

基調講演2 菊池 重雄氏（玉川大学コア・FYE教育センター長）

フロアーからの質問

[第2部] 学部の取組報告・討論

各学部からの初年次教育への取組について報告

質疑応答・討論

基礎教育の充実というテーマでの FD フォーラムが本年度を含めて3回目となる。次年度については、同じテーマで開催するか、別のテーマを考えるか、フォーラムの実施結果を見ながら検討することになる。

2. 授業公開

各学部の主体的な取り組みとしては一定の成果があった。

ただし、授業公開の元来の目的である、教授法の向上という目的にどこまで貢献しているかどうか。また、授業公開がこの目的に対するもっとも合理的・効率的な方法であるのか。SG2の中でも議論は重ねたが、いまだ十分な結論は得られていない。

学部の特性を反映して、文化系学部では授業公開の効果に対してやや否定的、理科系学部ではやや肯定的に受け止められているのは事実である。

授業公開については、根本的に検討を加えるべき時期に来ていることは間違いない。次年度の課題としたい。

【SG3】…情報宣伝活動を担当

(総括と課題)

1. FD ニュースについては、年 3 回の発行した (最終ニュースは 3 月末に発行する)。

- ・ 1 ページ目の文章 (巻頭) について

原稿依頼は、FD 委員会に諮る前に SG3、FD 委員長との打ち合わせにより依頼する方が良いと思われる。以下に今年度の巻頭の筆者とタイトルを記しておく。

No.24…渡部教務部長「FD 活動、第二世代への指向」2008 年 6 月

No.25…八木 FD 委員長「大学のユニバーサル化と授業改善」2008 年 10 月

No.26…奥林副学長「社会人基礎力教育の意味するところ」2009 年 3 月末予定

(参考) No.23 は、秋澤薬学部 FD 委員長 2008 年 4 月

No.22 は、今井学長 2007 年 12 月

- ・ FD ニュースの発行には各 SG との連携が必要。
- ・ 全学 FD フォーラムの記事が掲載できればよいが、3 月中旬開催と時間的な制約がある。
- ・ 4 ページの区切りは何とかならないか (予算的なものだろうが)

2. FD 活動の HP について

- ・ 本学の HP のメンテの扱い

⇒ 来年度より、本学 HP の教育システムのページよりアクセス可能となった。但し、メンテと継続的な運用が課題でもある。

【SG4】…教員研修等を担当

(総括)

本年度 SG4 の活動としては、新任教員の研修についてのプログラムを作成すべく検討をかさねた。そのために、他大学の新任教員研修についての情報収集、学内のいくつかの部署からの意見聴取などをもとに、研修プログラム案を作成した。その後、教務部長より独自の教員研修案が示され、SG4 で検討の上、前回 FD 委員会に提示されたが、異論多く、再度次年度 SG4 で検討することになった。

(課題)

上記の経緯を踏まえ、新任教員研修をいつ、どういう形で実施するかをあらためて議論し、決定する必要がある。

以上

FD 委員会から

- * 関西地区 FD 連絡協議会 Newsletter 創刊号の内容を要約しました。要約に関する文章の責任は、すべて SG3 担当の私、紙にあります。
- * 早いものであったという間の 1 年でした。3 月に開催された全学 FD フォーラムでは「初年次教育」について 4 時間にわたって熱き議論が交わされました。盛会でした。SG2 の先生方、教務課の方ご苦労様でした。
- * 皆様からのご意見を紙面でも紹介したいと考えています。随時、メールで結構ですから、FD 委員もしくは教務課 (kyomu@ofc.setsunan.ac.jp) までお寄せ下さい。